あこう通信
～「いい顔　いい声　いい心」～
発行：令和６年４月１２日（金）NO.2　文責：副校長　津田　幸一
学校 HP　URL http://www.nagasaki-city.ed.jp/kosakaki-e/index.html　（２次元コードからどうぞ）

本格始動　～入学式～

４月１０日㈬は入学式でした。
新入生の保護者の皆様におかれましては、お子様のご入学おめでとうございます。
新入生は、やや緊張しながらも立派に式に参加していました！
期待に胸を膨らませて入学した 100 名を加えて、令和６年度の小榊っ子 686 名の本格始動しました。

4/8
新しい学年・学級
担任の先生
専科の先生
だれなんだろう？

4/10
この日のために
練習してきました。
ご入学
おめでとうございます！

「無条件の安心感」が子どもの社会を広げる

発達心理学でいうと、子どもは、いくつかのステージごとの「安心感」をステップアップして、少しずつその社会を広げていくそうです。
まず、第１ステージは「家族」です。ここでの安心感が以降のステージの土台になりますので、とても重要です。家族に「自分という存在を、無条件に受け入れられているという感情＝安心感」をもっている子どもは、次のステージに気持ちが向かいます。
第２ステージは「親類」です。子どもにとって、家族から少しだけ外にある社会です。我が子のことを思い返すと、長男は、親類の集まりでは部屋の隅に隠れたり、親類が話しかけても逃げたりする様子がありました。それが機会を重ねるうちにだんだんと慣れ、打ち解けていったように思います。
第３ステージは「ご近所さん／近くに住む友達」、第４ステージは「幼稚園・保育園」・・・というように、充分に「安心感」を得るごとにステップアップし、より外に向かってより大きな社会に順応していきます。
そして各ステージの境界線では退行することも…。
「小学校」という大きな社会は、いくつかステージを超えてきたところにあることになります。
新しいステージの境界線にあるお子様によっては、何かしらの不安を感じたとき、**第１ステージに戻り安心感の再確認を求めようとする**ことがあります。

そのようなことから、入学後には、もしかすると、朝から「学校にいきたくない！」ということを言い出すこともあるでしょう。そんなときは、「いや、行きなさい！」と叱ったりせず、黙って**ぎゅっと抱きしめて**あげてください。意外に「分かった」と学校に行く支度をするかもしれません。
お子様が、自分が学校に行っても「お父さん・お母さんは、離れていかない」という気持ちをもてているかが肝です。

さて、**「母子分離不安症」**という症状があります。
この症状の児童を担任した経験を記します。
３年生から不登校状態になったＡさんを、その子が６年生時に担任をしたことがありました。２５年前です。
当時の私にできたことはすべてやったつもりです。毎朝Ａさんの自宅へ迎えに行き、「今日は電柱〇本分歩こう」と登校練習をすること。週１回の家庭訪問をし、一緒に勉強とテレビゲームをして過ごす時間をもつこと。（当時の私に知識があれば、きっとご家族と一緒に支援の対策を模索したのに・・・という反省があります。）
その際に、「学校に足が向かないのはどうして？」とときどき尋ねましたが、回答はまちまちでした。「行っても知らない人ばかりだから」「勉強についていけないかも」「家にお化けが出るから」などです。「あれ、この前とは理由が違うね」と言いながら追って尋ねると、毎回共通した答えが返ってきます。
それは、「自分が家を出ている間に、家族がどこかにいってしまうかもしれない」という不安です。どうしても、お母さんを残して学校に行けないと言うのでした。
私の力不足で、その年の登校は卒業式１日のみ。
やるせない思いからいろんな本を読み、その時初めて「母子分離不安症」を知りました。Ａさんの場合は、その不安を不登校という形で表しましたが、人によっては場面緘黙（学校では言葉を発しない）になったり、友達に攻撃的に接するようになったり、よくうそをつくようになったり・・・と、様々な表出のしかたがあるとも知りました。

私がこの経験から得たこと。それは、「学校単独の力には限界がある」ということです。
学校は「家庭や地域と連携し、子どもと向き合うことが大切だ」と強く考えるようになりました。Ａさんと出会いで学んだことです。
特に問題行動等があった場合は、学校は家庭と情報を共有して、手立てをともに考えていくことが大切です。
今年度も、家庭・地域と、手を取り合って小榊小学校の子どもたちの成長を支えていければと思います。